

特例子会社での補助具の活用

スリーエムフェニックス株式会社 大神田正己

1. はじめに

親企業である住友スリーエム㈱は、約3万5千種類もの製品を生産しており、身近なものでは道路標識や貼ってはがせるメモ用紙などがあり、文字どおり多品種少量生産の会社である。わが社は100%親会社から業務を依頼されているため、各事業部から多品種の製品が持ち込まれるケースが多く、各種工業用製品の検査梱包作業を中心に、P/C入力業務や各種サンプル作成、ブックレット作成や発送等、幅広い業務に取り組んでいる。

2. スリーエムフェニックス㈱の概要について

設立1997年10月16日、同年12月1日特例子会社として承認される。従業員22名（うち、障害者16名で全員知的障害者、重度4名含む）で、業務指導については4人の社員に1人の割合で計4人が指導に当たっており、業務指導はもとより社会生活面に関することも指導を行っている。

待遇面では、給与関係と退職金を除いては福利厚生関係等を含めて親会社の社員とほぼ同等である。レクリエーション活動も全社的な行事のほか、独自のレクリエーション活動実施を含めて参加し、親睦を深めるように取り組んでいる。保護者会を6ヵ月に一度開催し、会社の状態や家庭での変化等についてコミュニケーションをとっている。

その他、親会社の事業所内には授産施設が18年前から設けられていて、14人が特例子会社とともに連携をとりながら一般就労に向けて一生懸命取り組ん

でいる。

3. 背景

当社では親会社から多様な業務を受け入れて作業をしている。業務によっては生産ラインに出向いて行うものから、製造部から製品を持ってきて加工するもの、業務用サンプル作成等、作業の中味が多岐にわたっており、継続性のないもの等も多くあり、その場で種々対応しなければならないことがある。

知的な障害を持つ社員の手先の器用さや、スピード面において苦手としている者も少なくない。そうしたことから、だれでも「安全に」「早く」「正確に」できるようにするためにも治具等がとても重要な補助具となる。

同時に補助具（治具）によって多くの社員がスムーズに作業ができるようになり、自信がつかつ仕事により興味が湧くなど意欲的に取り組むことができる。また、日ごろから社員に「やりにくい作業」



作業風景

「大変だと思う作業」「こういった物がほしい」等、何でも思っていることを伝えてほしいと言っている。

そのなかからアイデアが出れば暫定的にダンボール等で簡単な治具を作り試して使ってもらい、そこからいろいろな意見を集め集約して治具を作成して使ってもらおうようにしている。

そこには一人ひとりの社員が自分の考えを出して参画しているという意識があり、これは大切な要素だと考えている。

3.1 カット治具

各種製品のシート状のものから営業サンプル用に小さくカットすることも多くあり、カッティングマット上でカッターナイフを使用して切る作業があるが、下の写真のような治具によりナイフが滑っても



図1



図2



図3

手を切ることがないため安全が確保でき、安心して作業できるためスピードも格段に向上し、生産性が大幅に向上した。

人は危険を感じると手がスムーズに動かせないことが多い。

繊維材のシート状のものをカットするとき、図1の治具をチョウ板に取り付け上下できるようにして押さえてカットする。安全かつスピードアップできる。

テープカッターの底に厚鉄板を取り付け片手でテープを引き出しそのままカットできるようにした。頻りにテープを使うとき便利でスピードアップできる。



図4

3.2 穴開け治具

繊維材等のシート状のものに穴を開けるときに、ポンチの外径に合う管を固定しスプリングを入れてワンタッチ式として片手でシートを持ち右手でハンマを軽く叩き穴を開ける。穴の位置も正確で生産性大幅アップ。

3.3 ラベルはがし治具



図5

製品にラベルを貼る作業も比較的多くあり、図6のような治具により片手でライナー紙を引っ張ることによりラベルがはがれて片手で取ることができる。生産性向上につながる。

図6



3.4 ラベル貼り治具

円筒型のチューブ関係にラベルを貼るとき、そのまま付けるとシワが入ったりズレたりしやすい。

図7の方法でフリーローラー2本で行うと安定し同軸で回転するため、手先が器用でない人でもきれいに早く貼れる（品質、生産性向上）。



図7

3.5 回転スタンド

粘着テープ等を使用して包装する場合、テープ同士がくっつかないように剥離紙を間に入れるとき、図8のように行う。

回転するため常に手元で作業でき便利（生産性向上）。



図8

3.6 コンベヤーストッパー

自走式コンベヤにおいてフリーローラーを図9のように段差（高く）をつけて取り付け。特に重量のあるダンボールはそのストッパーの上に乗せながらパレットへ移動する（作業が楽になる）。



図9

3.7 カートンフラップ押さえ

各種製品をダンボール箱に入れるときフラップ部が邪魔になることが多い。

図10の治具2個を2カ所の角に止めて使用することにより作業がやりやすくなる（作業性向上）。



図10

3.8 コンベヤ下段の活用

コンベヤ先端部の下段に箱を設置してその中にテープカッターやラベルを置き、ムダな動作を省く（作業性向上）。



図11

3.9 数量確認治具

1個のダンボール箱に数百枚の製品を入れたりする場合、例えば100枚ずつ入れるときは、10枚×10個の治具に入れてから箱に入れることにより数量ミスを減らす（ミス減少）。



図12

3.10 カシメ治具

サンプル等台紙に製品を取り付ける場合、プラスチックのビスで止めたりするときに図13のような治具を使用してさらに早く簡単にできるようにした（生産性向上、安全性向上）。



図13

3.11 ポリ袋掛け

ポリ袋で包装するとき、三角形の形の棒にポリ袋を掛けると1枚ずつ取り出すことができる（作業性向上）。



図14

4. 補助具の使い方についての指導

新しく作った補助具を社員に使用させるに当たって注意していることは、基本として教え方4原則を中心に対応している。

具体的には同じ側に立って、言って聞かせて、やって見せ、わかるまで繰り返し教える。

わかったら今度はそのとおりできるかやってもらい、教えたとおりできたら褒めてやる。

こういった形で一度理解するときちんと手順にそって繰り返してできるようになる。

5. おわりに

知的障害者の職場拡大や競争力（品質、生産性、コスト、安全等）の強化に向けて、生産現場ではそのハンディキャップを乗り越えるため、補助具は欠かせないのである。

しかし一方で障害者の特性は個人により大きく異なり、また親会社の製品数の多さ等から毎日10種類くらいの製品に小回りのきく形に対応することが必要であるが、多くの場合は暫定的に治具で終わってしまう事も多いのが現状である。とはいえ常に改善を実施し仕事を変えていくことが重要である。

理想的には一人ひとりの特性に合った対応が望まれている。

今後は安全かつコストパフォーマンスを高め特例子会社として他社と連携をして会社の自立を目指し、同時に障害を持つ社員の自立につなぐことができればと強く願わずにはられない。

そのためにも社員のチャレンジ精神が重要であり、かかわるわれわれも常にチャレンジしていきたい。ヤル気は能力も上まわる。